

団体営圃場整備事業用地内埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

# 上林中道南遺跡

1985年3月

長野県下高井郡  
山ノ内町教育委員会

団体営画場整備事業用地内埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

# 上林中道南遺跡

1985年3月

長野県下高井郡  
山ノ内町教育委員会

## 序

上林中道南遺跡は、山ノ内盆地の頂点に位置し、国道292号線を志賀高原に向って、右側の山林と隣接した農耕地に所在する遺跡であります。

この地域に、昭和58年度から5ヶ年計画で、近代的農業をめざした団体営圃場整備事業が着手されました。これに伴い、このたび山ノ内町教育委員会では記録保存のため、緊急発掘調査を沓野土地改良組合のご理解を得て実施いたしました。

調査は、寒さ日毎に増す11月下旬から12月上旬に亘り、榎原団長をはじめ調査員・作業員の多勢の方々が、時には雪の舞う日も調査に従事していただき、予定どおり終了いたしました。ご協力いただきました方々には、心から敬意を表する次第であります。

調査結果は、予想を越えた多くの遺構・遺物が発掘され、山ノ内町における縄文早期及び古代文化を解明する上に、極めて貴重な資料を得ることが出来ました。佐野遺跡・伊勢宮遺跡等の学術資料とともに、多くの方々に活用されることを望む次第であります。

最後に、このような立派な報告書作成のため、終始ご苦勞いただきました関係者の皆様に対して深甚なる感謝を申し上げ、序にかえさせていただきます。

昭和60年3月

山ノ内町教育委員会

教育長 谷本利夫

## 例 言

- 1 本書は、山ノ内町大字平穂上林（畚野）地籍の団体営圃場整備事業に伴う緊急発掘報告書である。
- 2 発掘調査は、山ノ内町教育委員会が調査主体者となり、昭和59年11月20日より12月9日まで行った。
- 3 調査の整理作業は、昭和60年2月10日より3月20日まで、金井汲次顧問の指導のもとに布施谷利治、檀原長則、池田実男が行い、図版の整理は檀原長則に松野千枝子が協力して行った。
- 4 本報告は、檀原長則・山上右八・畔上秀雄・池田実男・東勇二郎・長沢本枝が分担執筆し文責を文末に記した。
- 5 周辺遺跡実地踏査及び、採集遺物の掲載については、関伊志雄・湯本重幸の協力を得た。遺構の写真は、檀原長則と布施谷利治が行い、遺物の写真は布施谷利治の撮影による。
- 6 出土遺物及び図類は山ノ内町教育委員会が保管している。

■題字は友野義平山ノ内町長

# 本文目次

序

例 言

挿図目次

図版目次

表 目 次

## 第 I 章 遺跡の位置と環境

- |                       |   |
|-----------------------|---|
| 1 位置及自然環境             | 7 |
| 2 歴史的環境               | 9 |
| 3 遺跡の範囲と山ノ内盆地における縄文遺跡 | 9 |

## 第 II 章 発掘調査

- |             |    |
|-------------|----|
| 1 開発計画      | 13 |
| 2 発掘調査までの経過 | 13 |
| 3 調査団の構成    | 17 |
| 4 調査日誌      | 17 |
| 5 土層堆積状況    | 20 |

## 第 III 章 遺構及び遺物

- |          |    |
|----------|----|
| 1 縄文時代   | 21 |
| (1)遺 構   | 21 |
| 2 平安時代   | 25 |
| (1)土師住居址 | 25 |
| (2)遺 物   | 28 |
| (3)石 器   | 36 |

## 第 IV 章 総 括

- |               |    |
|---------------|----|
| 1 縄文時代の遺跡について | 37 |
| 2 平安時代の遺跡について | 38 |
| 3 引用参考文献      | 38 |
| 4 む す び       | 38 |

## 挿図目次

第1図	上林中道南遺跡の位置と山ノ内町の先史遺跡	8
第2図	上林中道南遺跡の範囲	12
第3図	中道南遺跡、グリット設定図	14
第4図	沓野区圃場整備事業平面図	15
第5図	A I区中央土層断面図	20
第6図	A II区土師住東側土層断面図	20
第7図	A I 拡張区遺構実測図	21
第8図	A I区炉址附近遺構実測図	22
第9図	〃 集石遺構実測図	23
第10図	A II区集石実測図	24
第11図	〃 土師住実測図	26
第12図	〃 土師住下層実測図	27

## 写真図版

図版一	遺跡全影 A I区集石群全影	図版七	A II区出土子母口式土器外面 A II区出土子母口式土器内面
図版二	上林中道南遺跡の全影 龍宮清水源泉	図版八	A I 拡張区出土土器 A I 拡張区出土土器
図版三	調査関係者	図版九	A II区出土有尾式土器 A II区出土有尾式土器
図版四	A I区拡張区全影 A I 炉址、集石、鶉ヶ島台式土器集中区 全影	図版十	A I区炉址と集石附近出土土器 A II区出土土器
図版五	A I区の炉址 A II区集石	図版十一	上林グランド出土土器 A II区平安時代住居址出土土器
図版六	A I 拡張区南側1号集石 A II区子母口式土器出土状態	図版十二	尖頭器・剥片石器 磨石

## 図版目次

第1図	A I 拡張区出土土器拓影図(1).....	39
第2図	"      (2).....	40
第3図	"      (3).....	41
第4図	A I 区炉址集石附近出土土器拓影図(1).....	42
第5図	"      (2).....	43
第6図	"      (3).....	44
第7図	A II 区土師住附近出土土器拓影図(1).....	45
第8図	"      (2).....	46
第9図	"      (3).....	47
第10図	"      (4).....	48
第11図	B 区出土土器拓影図.....	49
第12図	土師住居址出土土器実測図.....	50
第13図	石器実測図(1).....	51
第14図	"      (2).....	52
第15図	上林グランド出土土器拓影図.....	52
第16図	夜間瀬 前坂出土土器拓影図.....	53
第17図	A I 区、A II 区グリット実測図.....	54
第18図	B 区グリット実測図.....	55

## 付表目次

第1表	上林中道南遺跡出土遺物集計表.....	28
第2表	縄文時代の編年.....	29





# 第 I 章 遺跡の位置と環境

## 1 位置及自然環境

上林中道南遺跡は、山ノ内町大字平穂647番地、児玉光男氏外所有の田及び畑等の耕地及び山林、宅地に及ぶ面積約3万㎡の範囲に所在すると思われる。

志賀高原に水源を発する横湯川と角間川に挟まれた低平な長い台地の基部に立地しており、約100m南方の開折された角間川の溪谷の深さは、4～50mに達する。

標高は、遺跡の中心部で794.3mである。東よりの上林ゲート東側の山裾より多量に湧出する龍宮川の流れが、台地を貫流し灌溉や生活用水となっているが、遺跡に関係深い川であることが推定される。

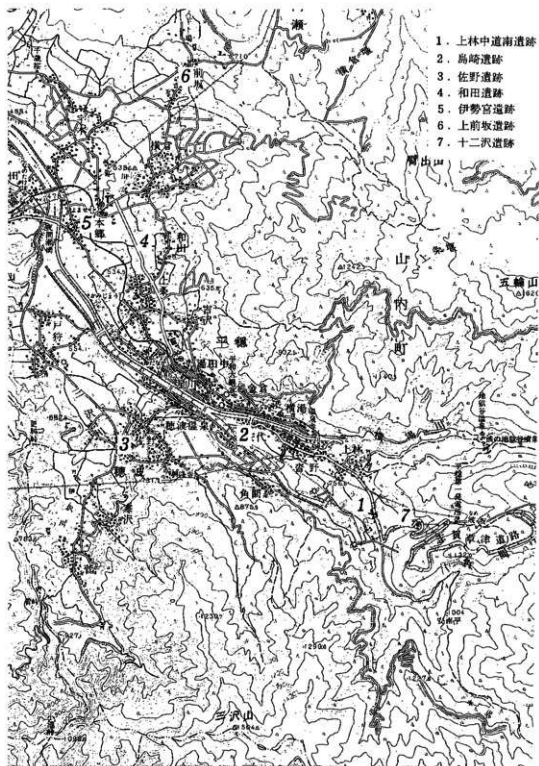
志賀草津有料道路は、約80m隔てて東を走り、その北は上林の旅館街となっている。また、菅野の集落は街道にそって町家をつくり、その下手は横湯川と角間川の合流点から夜間瀬川となり、近くに町内の穂波、遠くに夜間瀬の集落を望むことができ、遠く北信五岳の山々を望んでいる。

遺跡の背景となる奥深い山稜は、利根川と千曲川の分水嶺の上信国境の山々(志賀高原を含む)で永い歴史と、無尽蔵ともいうべき資源を持つ宝庫で、まず東に位置して焼額山(1.960m)東西館山(1.756m)、志賀山(2.035m)、また遠く岩菅山(2.295m)、烏帽子岳(2.230m)ほど、三国山脈の山々が連なっている。遺跡の南は三沢山(1.504m)から、中倉山(1.686m)へ続き、北は五輪山(1.620m)から里山の尾根に連なっている。

菅野から入山して、草津へ通ずる現在の志賀草津有料道路は、笠ヶ岳の腰から通ずる草津道と共に古代から上野国へ通ずる山岳道路の原形に沿って開かれている。

かつて志賀高原原木戸池付近から石刃らしいものが出土したと報告があり、旧・新石器時代を通じて永く採集経済に依存した古代人の入山の証となるもので、細くて険しいその山岳道をたよりに生活の糧となる動・植物や繊維を捕獲・採集して四季折々の生活サイクルを続けて来たものと考えられる。

そのような資源を持つ山を背景にした「上林中道南遺跡」及び隣接する十二沢遺跡は、縄文創草期の頃より生活の場となったことは極めて自然であり、当時としては最も恵まれた環境の地であったと推定されるのである。



第1図 上林中道南遺跡の位置と山ノ内町の先史遺跡

## 2 歴史的環境

志賀高原の奥深い山林内には、まだ多くの遺跡があると思われるが、調査が不十分であるため遺跡発掘の例は数少ない、今知られているのは「十二沢」の縄文創草期から前期の遺跡と、「島崎」・「原」・「天川」等の中期の遺跡である。次の時代となる弥生時代の遺跡は沓野にはない。次いで古墳時代を過ぎて、平安時代になって開拓の歴史が初まり、鎌倉時代は金倉井牧の全盛時代となるが、その範囲は夜間瀬川の両岸・旧平穂・穂波の地帯から沓野台地及び志賀高原を併せた広大な地域であった。その頃、台地の下手に奥長倉が諏訪社を祀って盛んになったが、しかし草津へ通ずる宿場であった沓野の集落は、逐次上手に発展し奥長倉は社地を残して移り、天正6年(1578)頃は完全に空郷となった。

沓野はその後、室町時代中期の「諏訪上社遺宮帳」には、奥長倉・からくら(金倉)・善能寺は「高梨之内」と註記されているのでその当時は高梨氏支配であったと推定される。

天文22年(1533)高梨氏は武田氏の攻撃と背後から夜交氏・小島氏に背かれて遂に中野の館と放棄して越後の上杉氏のもとへのがれるのである。斯くして沓野は武田氏領となるが、天正10年(1582)3月、武田勝頼が織田・徳川の連合軍に敗れ、一旦は織田氏領となるも同年6月織田信長が京都本能寺において亡び、この地は上杉景勝の支配するところとなった。

慶長3年(1598)上杉景勝は金津へ移封となり、直ちに豊臣秀吉の蔵入地となるが、同8年より家康の6男、松平忠輝が13万石で治めることになった。同20年忠輝は領内15カ所に集鷹山を設け集鷹衆を11人任命した。

元和8年(1622)上田城主真田信之は突然の命に依り、12月松代城へ移り、佐野・湯田中(沓野を含む)を領有した。その後、宝暦12年(1762)沓野は藩に願って、湯田中村より独立したのである。天保15年(1844)佐久間象山は、佐野・湯田中・沓野三カ村の利用掛に任ぜられ志賀高原から栄村秋山郷を探索し、『韜野日記』を著した。

明治維新を迎え廃藩となり、沓野村では象山の後、利用掛になった、館 孝右衛門に依頼して、かつての志賀高原の広大な藩林を民有地に引き戻す運動を重ね、遂にその目的を達し現在の和合会の基礎が確立したのである。

(山上 右八)

## 3 遺跡の範囲と山ノ内盆地における縄文遺跡

### 〔遺跡の範囲〕

今回の調査に合わせて周辺の調査を行い志賀草津ルート料金所南側付近からも遺物の採集を見た。東の十二沢遺跡との関連性も考えられ、面積約30,000㎡の広範に亘る遺跡と推測された。

## 〔山ノ内盆地の縄文遺跡〕

### (1) 東部平穏地区

町内における縄文中期の遺跡、上条遺跡は、湯本直治氏の所有地が中心である。同氏が水田区画整理の際出土した多数の土、石器類の中に、加層利E式完形土器1体と石皿がある。山ノ内町教育委員会が2次にわたって行った町誌編纂に関する発掘調査によっても多数の土、石器類が出土し、四ツ谷・吉沢遺跡と共に縄文中期加層利E式遺跡が現在の上条区を挟んだ形で所在する。

上条の場・三社遺跡からは縄文前期末の土器、打石斧、石匙、凹石、石鏃等が出土している。横湯、角間両川の合流点の舌状台地上に古くから知られた島崎遺跡がある。土器は縄文中期阿玉台、加層利E式の各時代にわたり存在する。石器類も多く打、磨石斧、石鏃、石匙、石棒等の出土もあり、遺跡の範囲も町内縄文遺跡中上位に属する。

### (2) 南部穂波地区

夜間瀬川と箱山の間に戸狩区川原・月影の2遺跡がある。ともに縄文中期末の土器片及び、打、磨石斧が出土している。昭和51年度国指定史跡・佐野遺跡は、数次にわたって発掘調査が実施され集石址7、石囲炉1カ所の遺構が検出されている。学術発掘と、これまでに出土の遺物を合せると520箇体分に及ぶ多量の土器と土偶・耳飾・剣状土製品・スタンプ状土製品・石鏃多数・石棒16・石鏃80・石匙・石篋・磨製石斧・打割器・敲打器・石皿・石臼・凹石・磨石・石剣・石刀・垂飾・クルミの炭化物・シカ・イノシシの骨等多種類である。数量の多い土器は亀ヶ岡文化圏の大洞BC式と同C<sub>2</sub>式を佐野1式、大洞C<sub>3</sub>式を佐野2式として位置づけられている。中部山岳地帯最北辺部における縄文晩期前半の重要遺跡である。長原・堀之内・円星里・富士宮遺跡からは、縄文期の石鏃、石鏃、石匙、打、磨製石斧の出土を見ている。白鳥孟治氏により富ノ原遺跡からは、石鏃、磨製石斧、滑石製垂玉が採集されている。

### (3) 西部夜間瀬地区

高社山と飯盛山の間の鞍部、通称「唐笑通シ」の南面や長く尾を引く高社山の裾野と、山ノ内盆地の再先端部には、縄文各期に亘る数多い遺跡がある。とおみ通し・坂原・北志賀・上前坂・坪根・前坂・上野・横峯沢の各遺跡は前坂区集落をとり囲んで点在し、粘土層から出土した石刃を初め遺物は草創～前期縄文式土器が主体である。矢崎・城の腰遺跡は横倉区内にあり、主として前期縄文式の南大原・諸磯B・下鳥式土器や、それ等に伴う大形石棒、石匙、石鏃等が出土している。中でも黒曜石製の「釣針」状石器は貴重である。出土品の豊富な天神森遺跡は横倉区内中心にあり、その石棒、石鏃類の中にあつて特に目立つものに数多い小形磨製石斧がある。標高1,100mの高所にある北の窪遺跡からは、長さ20cmに及ぶ頁岩製の入金加工された神子柴形の石斧が出土し、坂口兆氏によって保管されている。

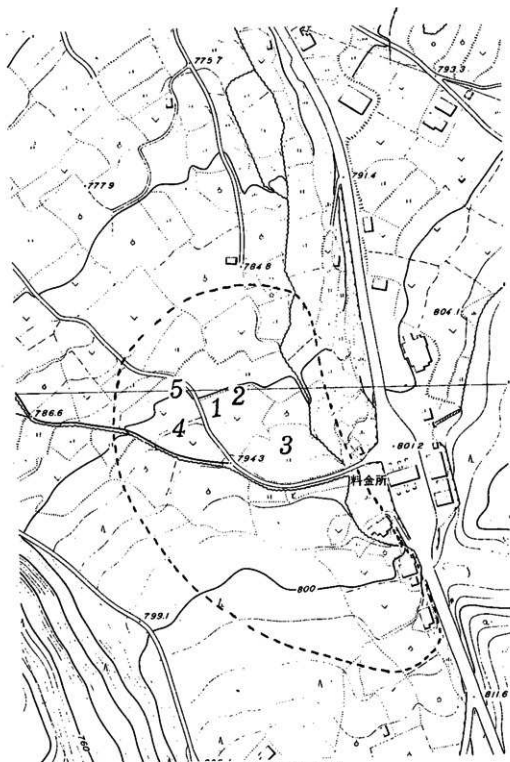
町・東町・伊勢宮・上条境の各遺跡は、ともに夜間瀬本郷の区域内にあって出土土器類から見ても関山、有尾、南大原、諸磯、踊場、下島、阿玉台、加曾利E、堀之内、佐野の縄文前期から晩期に及ぶ縄文の一大複合遺跡地である。出土品も石鏃、石匙、石鏃、石槍、打、半磨、磨製石斧、玉類の研磨に使用したと思われる砥石、凹石、石棒、石皿、多凹石、磨石、挾状耳飾、垂玉等多種類に及び数量も多い。

伊勢宮遺跡については昭和54年度夜間瀬南部地区再編農業構造改善事業に伴う緊急発掘調査が、山ノ内町教育委員会によって実施され、縄文時代後期前葉の特徴を持つ弧状列石遺構2、葉石遺構4、土城28の各配石遺構とともに柄鏡形敷石住居址など3棟が検出された。県内北限の発見となった柄鏡形敷石住居址のうちの1号は完全な形をとどめていた。

宇木・八柱神社・横前遺跡は宇木区八柱神社を中心に点在し、縄文前期有尾式の土、石器、鉄器、国分期の土師器等が出土している。

#### (4) 北部須賀川地区

下中須賀川・土橋の遺跡からは、縄文時代早期から中期に亘っての土器片の出土を見ている。下須賀川より落合へ通じる県道右側畑地中にある下明神遺跡からは山形、格子目、楕円を有する早期縄文土器と、繊維を含んだ前期縄文の土器片、石鏃、及び礫器等が出土している。遺跡数及び遺物の出土量の比較的に少ない須賀川盆地内において注目される遺跡である。八丁原遺跡からは昭和40年8月、長さ8.7cmの頁岩製両面加工の立派な尖頭器が滝沢善次郎氏により発見されている。(畔上秀雄)



第2図 上林中道南遺跡の範囲

- |                           |          |
|---------------------------|----------|
| 1. A I 区調査区集石群            | 4. B 調査区 |
| 2. A I 区軸ヶ島台式土器集中区        | 5. 大石露出地 |
| 3. A II 区子母口式、関山式土器、土師住居址 |          |

## 第II章 発掘調査

### 1 開発計画

#### (1) 地区の概要

本地区は、山ノ内町の東南・志賀高原の山麓に位置し、一級河川角間川と横湯川の浸蝕崖に挟まれた台地上に所在し角間川に面している。東西の平均勾配は15分の1の傾斜で、標高670m～790mにある水田地帯及び畑地帯である。

ここに所在する圃場は、旧態依然の小区画であり、加えて農道の整備も遅れて近代の機械化農業をみざす昨今では農耕作業に多大な支障を及ぼしている。

これらの点を改善し近代的な農業を展開するため沓野土地改良組合(組合長児玉環、組合員130名)を設立し、昭和58年度に団体営圃場整備事業として新規採択され、5カ年の計画で33.8ヘクタールの圃場整備事業に着手し、60年度、施工区して、本遺跡の緊急発掘調査が計画されたのである。

#### (2) 事業計画の概要

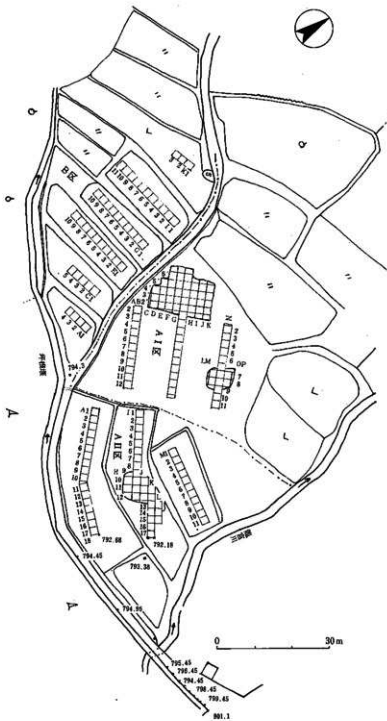
- 1 区画整理 A=33.8ha (標準区画20アール)
- 2 道路工 L=4.073m W=4.0m～6.0m
- 3 用水路工 L=4.056m
- 4 排水路工 L=2.534m
- 5 客土 A=11.8ha
- 6 取付道路 L=90m、W=6.0m
- 7 総事業費 330.000千円

(長沢本枝)

### 2 発掘調査までの経過

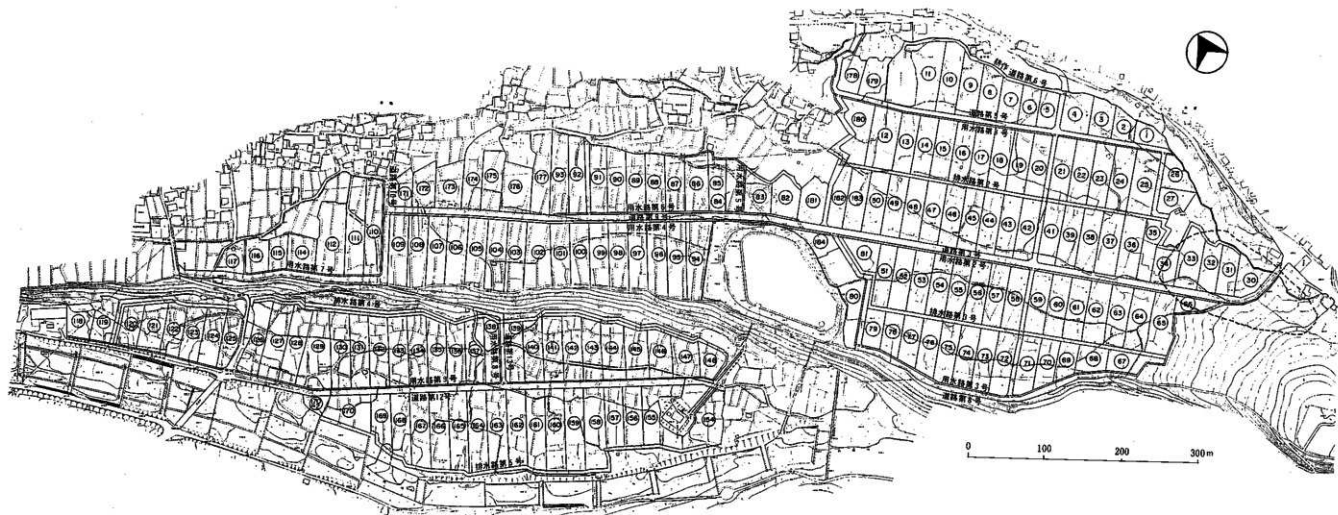
上林中道南遺跡が、確認されたのは、昭和42年3月町誌編纂のため、土壤調査が行われた際、この場所より、地表下1mのローム層より黒曜石の石核1点が出土して注目された。さらに昭和46年長野県史編纂事業の一環として、遺跡の詳細な調査が行なわれ、地元沓野区の耕作者の証言によって埋蔵文化財包蔵地として確認された。

昭和58年、遺跡を含む沓野地区の農耕地に団体営の圃場整備事業を導入して農業基盤を確立して近代的農業を推進する事になった。これに伴い山ノ内町教育委員会では、県教育委員会文化課



第3図 上林中道南跡グリッド設定図





第4图 崂山区圈地整修前平面图

と昭和58年1月、事前協議を開始し国・県費の補助をうけ、緊急発掘調査を実施する事になった。昭和59年10月山ノ内町文化財審議委員（日本考古学協会員）金井汲次氏の推薦により、調査団の編成に着手し、団長に檀原長則他調査員を決定し11月20日から、発掘調査を開始した。

（東 勇二郎）

### 3 調査団の構成

調査責任者	谷本利夫	山ノ内町教育委員会教育長
顧問	金井喜久一郎	山ノ内町文化財保護審議会委員会会長
"	金井汲次	日本考古学協会員 山ノ内町文化財保護審議会委員
団長	檀原長則	日本考古学協会員 長野県考古学会会員
調査員	山上右八	山ノ内町文化財調査員
"	畔上秀雄	長野県考古学会会員 山ノ内町文化財調査員
"	池田実男	中野市文化財保護協力員
調査補助員	関伊志雄	長野県文化財保護協会員
"	布施谷利治	布施谷写真館
"	松野千枝子	国学院大学学生
事務局	教育委員会事務局長 畔上忠雄/社会教育係長 東勇二郎/坂口孝雄/竹節取/小林貞信/吉池寿幸/白鳥美恵子/藤沢光男/青木正彦	
農政課	長沢本枝/竹節義孝/中村賢一/山本悦三/畔上順一郎/渡部 隆/秋元今朝幸/鈴木守男/渡辺千春	
発掘調査遺物		
整理参加者	関 春江/関くに子/宮崎 光/小林登江/小林富江/黒岩しげ子/小林米子/関右記子/宮崎睦子/児玉かず枝/山本辰江/山本英子/池田ひさい	

### 4 調査日誌

11月20日（火） 雨

午前9時より山ノ内町役場に於いて、調査団の結団式、調査方法の計画などを打合せ、午後2時30分より、遺跡に於いて金井喜一郎顧問、地主代表として杵野区会計係、関信夫氏の参加を得て、発掘祈願祭を行い、後・表面採集を行うが、遺物は1点も得られず終了した。

11月21日（水） 曇後晴

地主交渉のできたAⅠ区にトレンチを等高線に沿って等間隔に3本設定し、出土遺物の濃密な場所を拡張調査する方法をとった。耕土は、小形バックホーで排土した。深さ150cm～20cmで、燃糸文土器、轆ヶ島台式土器を確認し、早期の遺跡であると確認した。続いてAⅡ区にもトレンチ設定、表土剥ぎを行い、土師器、国分期の甕破片、羽状縄文土器片を得た。

出動人員 11名

11月22日(木) 曇後雨後晴

A I 拡張区、畦を残して全面的に拡張する。Eグリット遺物集中し、撚糸文、縄文、無文、楕円式の带状施文の山形押形文土器など出土する、平板測量を初めるも雨のため中止する。

A II 区表土剥ぎ終了B区に移転する、A II 区Aグリット 東方とKグリットは出土遺物が、検出されなかった。

来訪者 村上富吉氏、 出動人員 11名

11月24日(土) 曇後雨

A I 区拡張区を更に拡大し作業員に依る発掘作業を行う、A II 区も同様に作業を行う、A II 区Aグリットは表面から、黒土層、黄褐色土層、黄色土層で、下層は石が連なっている。A II 区出土遺物、細石刃、黒曜石片、器厚の薄い縄文土器など。

出動人員 20名

11月26日(月) 晴

A I、A II 区発掘作業、A II 区Aトレンチの断面測量、遺跡全体図測量、A I 区集石状の遺構あり、小形精巧な黒曜石の石鎌・磨石など、A II 区土師住は、内黒環を検出。

来訪者 小山信正氏・農政課長 滝沢善次郎氏・出動人員19名

11月27日(火) 晴後曇

A I 区、A II 区発掘作業、全体測量終了、レベル測量、A II 区平板測量、石組竈確認、床面は焼土面より推定。内黒環、盤、甕破片。A I 区、剥片石器、凹石、早期土器片出土する。午後、雪、みぞれのため作業中止する。

出動人員 17名

11月28日(水) 曇

A II 区Iグリット、平板測量、A I 区発掘作業、A II 区土師住東、集石状の個所あり、土師住清掃写真。土師片と縄文土器(有尾式)は、僅かな差或いは、混在している。A I 区鶴ヶ島台式土器片多く出土。

出動人員 23名

11月29日(木) 晴

A I 区、発掘作業、畦をとり除く、平板測量も並行して行う、H3'グリットより尖頭器、出土、そばに条痕文土器片2点あり、A II 区、平板測量、レベル測量、B区平板測量。

出動人員 23名

11月30日(金) 晴

A I 区畦をとり除く作業続行、早期土器片出土、平板測量続行。A II 区土師住下層掘り下げ、黒浜式の土器の下10~15cmの間層において、子母口式土器片が展開していた。以下地層も地山層に近づくが、無遺物層となる。東側集石の拡張。本日は団長私用のため休み、顧問、金井汲

次氏の指導をうけた。

出勤人員 23名

12月1日(土) 晴

A I区平板測量、Kグリット拡張、写真撮影、9群の集石を認めた。Lグリットの石罫2個、行方不明となる。A II区土師住下掘り下げ、集石方眼糸測図、B区発掘作業、平板測量、黒土層の厚薄の場所あり、土器片は僅かに石の間に散在して出土する。早期土器片、条痕文、縄文に表裏施文の山形押形文土器片がみられた。

来訪者 竹節行則氏 出勤人員 23名

12月2日(日) 晴後曇みぞれ

A I区平板、レベル測量、写真撮影、A II区、子母口式土器片多く出土、B区発掘作業、平板及びレベル測量、遺構はなし。

出勤人員 20名

12月3日(月) 降雪のため作業中止。

12月4日(火) 晴

積雪約10cmに達する、最初に除雪作業、A I区平板測量、遺物収納、黄黒土上に多く遺物出土、A II区、土師住下層平板測量、子母口式土器は、水田面下層60cmの辺に展開していた、B区発掘作業。

出勤人員 22名

12月5日(水) 晴

B区平板、レベル測量、遺物収納、Kグリット(大石の畑)表土30cm(黒土層)黄褐色土15cm、以下黄色土岩石層となる、薄手0.6cmの縄文土器出土、出土深さ25~30cm。3時30分より上林グランド管理棟で、中間慰労と成果の現状報告会を行う。

出勤人員 23名

12月6日(木) 曇

A I区MNトレンチ拡張、鶺鴒ヶ島台式土器片集中して出土、拡張、コの字形の炉址、直径約30cm検出、石罫・黒曜石剥片など出土。測量、写真撮影並行。A I、II区、B区、平板、レベル測量。

来訪者 金井喜久一郎氏 出勤人員 15名

12月7日(金) 晴

A I区Nトレンチ拡張、平板レベル測量、炉址より、1m程離れて焼石のみられる集石あり、周囲の石の点在により、直径3~4mの小形住居址と推定。炉址集石、方眼糸張り、L<sub>2</sub>グリットより鶺鴒ヶ島台土器片下、50cmで楕円押形文土器1片検出。本日で発掘作業終了。

来訪者 村上富吉氏 取材香山信毎記者 石川北信ローカル記者 出勤人員 19名

12月8日(土) 晴

A I区、炉址集石実測図、断面図、A I区E<sub>6</sub>グリットに、円形プランの柱穴状の個所あり、  
A II区各トレンチ、断面図実測。遺跡周辺調査。

出動人員 3名

12月9日(日) 晴

A I拡張区、B区トレンチ断面測図、本日で現地作業終了。

出動人員 4名

12月21日(金) 曇

資野のお湯を使って出土品の水洗作業、終って5時より岩戸屋にて18名の出席で慰労会を開催する。

出動人員 5名。

(東 勇二郎)

## 5 土層堆積状況

上林中道南遺跡は、火山噴出岩より成りたつ志賀高原旭山麓に位置し、山ノ内盆地の最上端を占める地に所在する。このため、層序は、第1層は黒色腐植に富む火山灰土で、黒褐色を呈する。第2層は黒色の火山灰土で、原地形により厚薄に堆積している。遺物は主にこの第2層から第3層の上部分から検出された、第3層は黄褐色土で、地山の黄色土層との混合土層である。この地山ローム層は、直径0.5×1mの石が含まれた洪積世堆積物でありこれが遺跡の概括な層序である。A II区土師住居址東側の地層は、水田造成と東側を流れる龍宮川の川道のため、層序が複雑になっていた。

(池田 実男)



第5図 A I区中央土層断面図

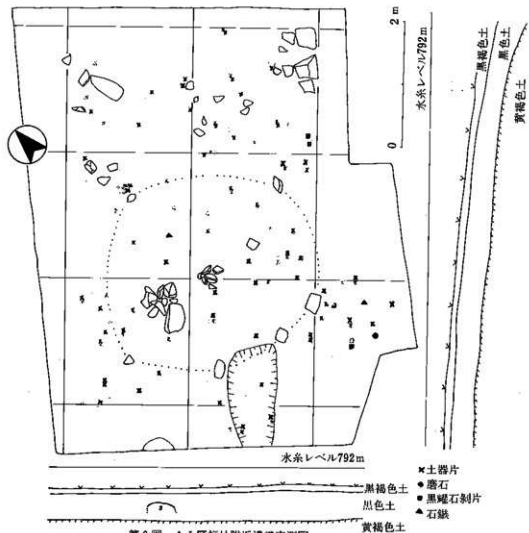


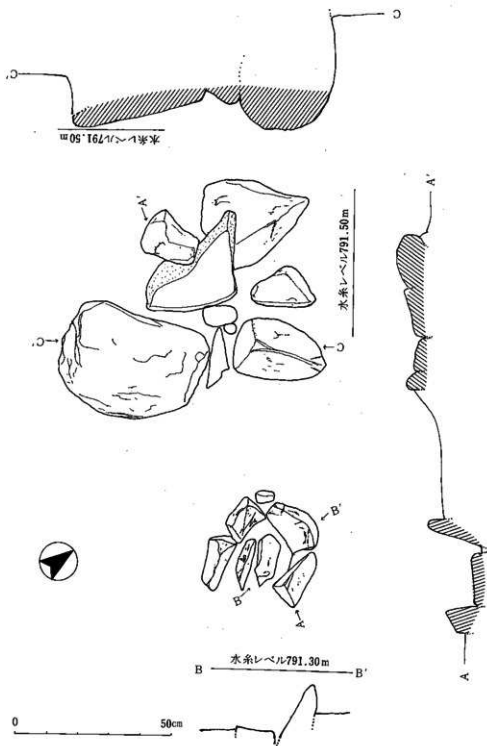
第6図 A II区土師住居東側土層断面図



〔集石状遺構〕

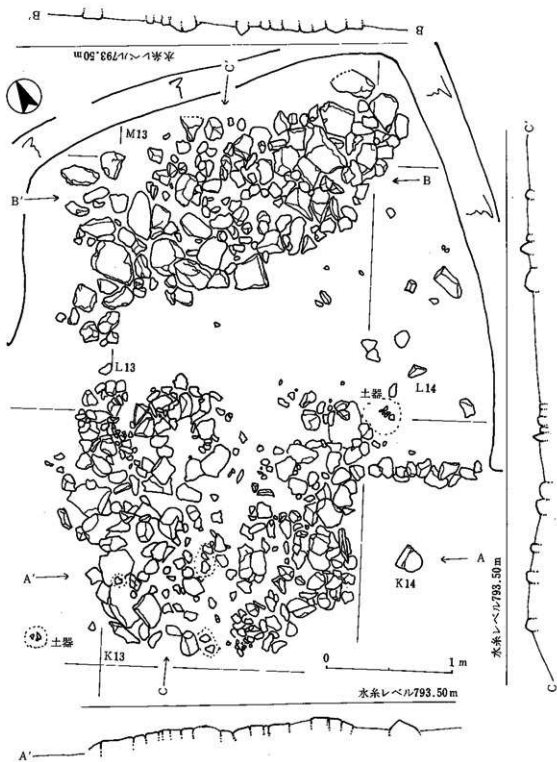
A I 拡張区には、一応まとまりある9群の集石を認めた。2群7群は列石状のもので、特に2群は、盤状の石がみられ、立てば2列に並列し通路状に復元できた。3群、4群は北方に連なり、5群・6群・7群も同じく北方向に連なっている。8群は、両端の開いた「コの字形」に開いて、配石されているのが注意されたが、火熱の痕は見当らなかった。これらの石は最大径60cm以下のもので、現地の下層に含まれる石と同じで、特に搬入されたとみられる石は発見されなかった。土器、石器類は、ローム層の黒黄色の混合土層から、耕土までの層に主に検出された。





第9図 A I区炉址集石遺構実測図





第10図 A II 区集石実測図

### 〔炉址及び集石〕

A I 区M<sub>8</sub>グリット付近は、黒土層の厚さが左右の層序より厚く、鶏ヶ島台式を中心とした土器が、集中して発見されたので、拡張調査したところ炉址と集石が確認された。

炉址は、東南方に向けた「コの字形」を呈する形態で、周囲を5個の石で囲んで内面の底に2個の敷石があり、赤褐色に火熱をうけていた。外径35×30cmの小形の炉址である。

集石は、端部が、3.5cm、炉より離れた西方より検出され、大は45×33cm、小は10cm程の8個の石でなりたち、1個を除いて平盤の石が多く、中には火熱をうけた石も存在する。また黒土層上に床面が存在するため、壁面と柱穴の確認はできず住居地の形態担模について確証に欠けるが、炉址の北方3.5m地点より急激な落ちこみになっていることや、炉の東南方に4個の石が配列し、これと北方にみられる石2個と結べば、3.5m×3mの楕円状の形態となり、これが住居地のプランとして推定される。また炉の南方の住居址と推定したプランの外に、幅80cm、長さ1.5m以上、深さ15cm程の落ちこみが確認された。

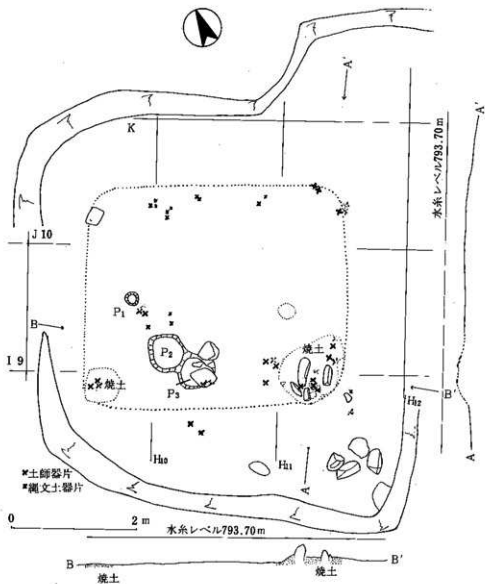
### 〔A II 区集石〕

A II 区土師住東方5m地点、K<sub>19</sub>-M<sub>19</sub>グリットを中心に2群の集石を認めた、水田の端部に当る位置のため、水田造成時に埋められた石礫とも思われたが、石の面が近世に移動した擦痕面などが、観察されなかった。また有尾式に伴うと思われる羽状縄文土器片が、集石上から検出されたので記録にとどめることとした。第10図はこの実測図で、左右2群の石と礫がなりたった集石群である。

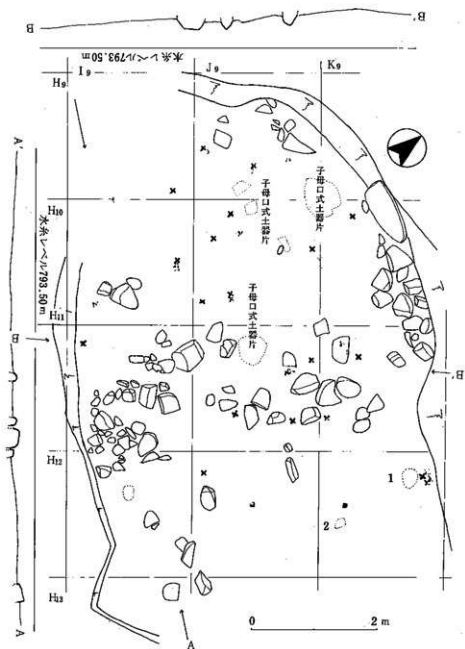
## 2 平安時代

### (1) 土師住居址

A II 区I<sub>10</sub>グリットを中心に、土師編年国分期の終末段階の住居址が検出された。遺構が浅いため、水田造成時に影響をうけて一部破壊されていた。黒土層上に住居址が位置するため、確認は推定値にとどまったが、焼土、竈の存在からコーナーに石組竈をもった4×3.5mの隅丸方形のプランを推定した。東南に位置する石組竈には、甕や坏片が転落したりして、周囲に焼土が広がっていた。南西の隅にも焼土の部分が、直径50cmの規模で確認され、副炉的な性格と考えられる。柱穴状のピット(P<sub>1</sub>)と土壇状のもの(P<sub>2</sub>P<sub>3</sub>)が、南側部分から検出された。



第11図 A II区土師住実測図



第12図 A II区土師住下層実測図

## (2) 遺物

## 〔土器〕

本遺跡出土の土器は、縄文草創期末より平安時代に及び、縄文中期から、奈良時代までの遺物は検出されなかった。発掘面積は約750㎡で、土器の総点数937片で詳細は第1表の如くである。

小面積の発掘であるため、一括の資料の取りあつかいも検討したが、A I区M<sub>6</sub>グリットより炉址が、検出されたのでそれらを考慮して、各地点別に資料呈示を行った。また、資料は、当地方では新発見のものが多くと浅学のため、誤謬が多い事と思われる。大方のご叱正を期待したい。また当遺跡より東方300mの十二沢遺跡に該当する上林グランド出土土器も関伊志雄氏の好意で呈示し合せて夜間瀬前坂出土の早前期の土器も湯本重幸氏の好意で掲載した。

## 第1群土器 (第1図) 11~32 (第6図) 127 (第11図) 189~193

器厚薄手 (0.5~0.6cm) の表裏施文の土器と表面に縄文が施文された土器で、繊維痕はなく、黒褐色から赤褐色の色調で、焼成は堅緻な土器群である。表裏縄文の施文は、内面は口縁部のみ、の施文とみられ斜縄文である。口唇は内面側に傾斜した形14と口唇の中央が尖った形127がある。草創期末の所産と考えられる。

第1表 上林中遺跡出土遺物集計表

## 土器

出土区	時期			前期	土師
	有文	無文	不明		
A I 拡張	221	179	6	3	
A I 炉址	71	44	2		
A II 土師住	98	73	4	52	124
B	37	23			
合計	427	319	12	55	124
時期合計	758			55	124
総計	937 (813)				

## 剥片

	黒曜石	その他
A I	13	19
A II	6	13
B	4	1
表探	4	1
合計	27	34
総計	61	

第2表 縄文時代の編年表

実年代	花粉帯	時代	特色	編年	
-約30,000年前	L帯 コメツガ シラビソ トウヒツ マ	先土器(旧石器)時代	ナイフ形石器の発達 局部磨製石斧の出現 尖頭器の普及	(中部) 石子原 杉久保 A I 茶白山 男女倉 B 小坂 上ヶ屋 神丁柴 矢出川	(関東) 中山谷 X 西之台 X
-20,000	R I 帯 トウヒ コメツガ ブナ・ナラ			細石器の発達	隆起線文系土器群 爪形文 # 押任縄文 # 回転縄文 #
-10,000	R II 帯 サワグルミ シナノキ ニレ ブナ ナラ	縄文	草創期 土器製作の開始 弓矢と石鏃の出現	石小屋 曾根 石小屋 増野川子石	井草丸島 大夏橋 立野 樋沢 細久保 塞の神
-9,000				貝塚の形成 漁撈活動の活発化	花綱下層 関山 黒浜 踏磯 A # B # C 十三菩提
-8,000				尖底土器と押翠文の盛行	九兵衛尾根 藤久保 五領ヶ台 阿玉台 I # II # III 井戸尻 I・II # III 曾利 I・II # III # IV # V
-6,000		前期	平底土器への移行 集落の拡大	中神ノ木 有南大原 上原島 下竈畑	花綱下層 関山 黒浜 踏磯 A # B # C 十三菩提
-4,000	R III a 帯		環状集落の出現 打石斧の多用	大洞 B # B C 大洞 C <sub>1</sub> ・佐野 I # C <sub>2</sub> # II # A 水 II # II	
-3,000	ブナ ナラ ニレ コオヤマキ	時代	後期 中部高地の集落激減 呪術的遺物の盛行 抜歯の風習	+	祇名寺 堀ノ内 I + I I + 加曾利 B II + # + 曾谷行 I + 安 # II
			集落の河畔低地への遷移 亀ヶ岡文化の伝播		

長野県史より

第2群土器(第1図) 1~13 (第7図) 128~130 (第11図) 191

撚糸文土器である。器厚薄手で、6は0.4cm、1は0.7cmで、他の土器片もこの範囲内にある。これらは焼成堅緻の土器で、黒褐色、赤褐色、黄褐色の色調で、胎土には繊維質が見られない。A I 拡張区から多く検出された。128は尖底部の破片である、概して小形の土器と思われる土器片が多く、早期前葉の土器群である夏島式土器と推定した。

第3群土器(第1図) 23~29 (第4図) 図83・84 (第7図) 131・132 (第11図) 194・195

押形文土器は15片検出された、うち1片は、A I 区炉址付近から検出されたもので楕円押型文である。山形施文のものは、横方向と縦方向の二者がある。25・26は同一個体と思われ、器厚0.8cm、復原口径22cm、黄褐色の色調で、焼成堅緻で胎土は精選されるが、中に6・7の撚糸文土器と同じく微粒の白色の岩石粉末が含まれている。

施文は横方向の帯状施文で、口唇まで施文されている。施文原体は2.1cmの長さのものである。194は前者よりやや薄手の土器で、内外面、口唇に横方向に帯状施文される山形文で、内面の施文は外面より、より鮮明である。23・29・194・195は桶沢式の押形文土器と思われる。24・28・83・84・131は、前者より薄手(0.4~0.5cm)の土器で、山形縦方向施文の24の土器には、中部日本の一部に分布する黒鉛含有の土器で胎土に黒鉛粒が認められる。83の楕円押型文土器も器厚は、0.4cmで堅緻の焼成の土器で、山ノ内町須賀川、八丁原遺跡出土の楕円押型文土器と似ておりさらに、南佐久郡、北相木村、栃原岩陰遺跡出土の楕円押型文土器<sup>(2)</sup>と同種のものと思われる。

山ノ内町の押形文土器など、早期の土器は、学術発掘で得られたのは今回初見である。

長野県での押形文土器の出土遺跡は、約300カ所といわれる。山ノ内町では、前出の八丁原遺跡で昭和36年発掘調査を行った際、撚糸文土器とともに楕円形・山形・楕円形と山形文の混合の3種の土器が採集され、夜間瀬、下明神遺跡からは山形・格子目・楕円押形文土器が採集されている<sup>(4)</sup>。また前坂の坂原、上前坂遺跡からも押形文土器が採集されている<sup>(5)</sup>。これらの押形文土器より、概して今回出土の押形文土器は古い様相を示すものが多い。

第4群 無文土器(第9図) 159・160

早期撚糸文土器群に続くものとして、無文土器群がある。本遺跡の如く関東地方の影響の大きい遺跡は、当然刻期文化の影響をうけた土器が存在すると思われる。器厚0.5cm~1cm、焼成堅緻の土器群である。器厚1cm以上の土器は本群と別種のものとして理解される。

第5群 沈線文土器(第3図) 61~65・67・68 (第11図) 196・199・201

[A種] 61~63・65は、器厚0.7cm、胎土焼成良好で、繊維質が僅かにみられる黄黒褐色の色調の土器で、幅0.25cmの先の平らな筥状工具による突刺文が連続し、沈線は、その工具を縦に使用して、斜状・フ状の平行沈線の施文の土器である。201は、黒褐色の堅緻な焼成の土器で胎土

に、繊維痕が僅かにみられ、器厚は0.9cmで口縁部が、やや外反した器形を呈し、内外面とも擦痕はみられず、文様は、口唇に直径0.2cm程の列点状の突刺文がみられ、口縁部は横に放射状などに、以下は縦方向に集合条線状の施文をしている。

〔B種〕 (第11図) 196・199

両者とも砂粒が、胎土に多く、196は雲母も含まれざらざらした感じの土器だが、焼成は比較的、堅緻である。黒褐色、黄褐色を呈し器厚は0.6cm内外である。199は、口唇に斜状に刻みがみられ、196も同様な浅い施文をしている。199は、口縁下に2条の横走の平行沈線がみられ、196は、逆三角形状に施文し中に右斜状の平行沈線で埋めている。右端が、列点状になっているのが注意される。

この群の土器は、野島式に類似する。

第6群土器 (第7・8図) 149~155

この子母口式土器は、A II区土師住下層、水田面下60cmの深さ(造成時の土盛分の深さも加算)より一括検出されたもので、他の地点でも1・2点の出土をみる。図示したものは同一個体と思われ、他に図示しない分を合せて1個体の6割位の破片が検出された。上層の有尾式(黒浜式)土器との間には10~15cmの黒土層が堆積していた。また同処より発見された同種土器は他に2個体の破片がみられる。黒褐色から黄褐色の堅緻の焼成の土器で、器厚は0.9cm~1.1mを計測する。胎土には、直径0.8cmの小礫が含まれ 繊維痕がやや明瞭に看取される。器形は砲弾形の尖底を呈すると思われる。条痕文が、表面は底部付近まで、内面は底部まで、器面調整の施文されている。口縁は僅かに波うち撚紐を軸にまきつけた圧痕文が口唇までも押捺され、施文原体の長さ約10cmの絡条体圧痕文が、口縁下に7~9条横位に施文されている。32の土器も浅い絡条体圧痕文の土器と思われる。

この種の土器は、性格がやや不明確な点が指摘されているが、北信では上水内郡牟礼村の丸山遺跡の12号土墳より、絡条体圧痕文土器が検出されている。また更埴市、佐野山A遺跡からも同種土器が採集されており、早期中葉の中部高地の様相を知るうえで、好資料であると思われる。

第7群土器 (第6図) 118~127

突刺文と沈線のみられる土器である。118~127は、同一個体の破片と思われる。A I区「コの字」形埴址付近より検出されたものである。黒褐色の色調で胎土焼成やや堅緻な土器で、器厚は1~1.1cm、胎土には長石粒などの砂粒とともに、雲母が多量に含まれている。内面は凹凸のある器面調整だが条痕文はみられない。繊維痕は僅かである。127の土器胴部の直径は約30cmを計測する大形土器の破片である。文様は、太い沈線で平行線や、三角形状につくり、縁に4本の面をもった工具で、突刺文をめぐらせたり、密に施文させたりしている。127は、これらの文様帯の下半部分と思われる。ここで問題になってくるのは、この土器と第8群土器(鶴ヶ島台式)との関係



で、前述の如くこの土器は、「コの字形」炉址付近より検出され、ここからは鶴ヶ島台式土器が、比較的集中して多量に検出されたからである。

条痕文のみられない点からすると先行の野島式土器と思われ、第6群の土器の細い沈線文とともに、このような太い沈線文が野島式土器にみられるので、後続の鶴ヶ島台式土器との時間差が、信濃ではどのようであるか今後の検討課題となろう。

第8群土器 (第2図) 36~53 (第3図) 56・58・59 (第5図) 100~112・114~117 (第6図) 118~127 (第7図) 134~138 (第11図) 202~208

鶴ヶ島台式に相当すると思われる土器を本群とした。本遺跡の主体をなす土器群である。

鶴ヶ島台式土器に関する報告例は、当地方では、下高井郡木島平村三枚原遺跡に例がある。従って北信地域での該期の様相は、類例が少なく明かでない。A I区「コの字形」炉址を中心とした地点から出土した土器を分類したのが、本群で黄褐色から黒褐色の色調の土器が多く、脆弱な焼成胎土の土器がめだち、胎土には繊維痕が顕著である。

口唇の形態は、a 平のものが多くみうけられる。(37・52・53・100・102・107・112・137・144・205) b 鋭角をなすもの (36・50・124) は少数である。描線は a 細線のもの (38・40・42・96・101・102・106) b 太線のもの、(51~53・97~99・103~105・108・112・118~127) などで、施工工具の形状と、使用方法により連続爪形C字文や沈線が描かれている。

#### (A種) (1)

やや太い沈線を斜状などに引いた、幾何学文様の交差点に、円形の竹管文の土器 (108~111・113・137・138・203~205) は、鶴ヶ島台式のメルマーク文様である。この円形文は a、竹管によるものと b、棒状工具と思われるものの2種がある。また101・137の土器には、補修孔がみられる。先行の野島式の土器からの系譜上の口唇の刻まれる土器 (50・52) もあり、52は器厚1.2cm赤褐色の色調で、焼成や脆弱な土器で、平な口唇、内面に条痕文がみられ、太い沈線の幾何学的文様がみられ、区画内を連続爪形C字文で充填させ、112の異形土器と文様に共通点のみられる土器である。

#### (A種) (2)

次に特色ある施文法は、三角形の幾何学的区画文に突刺文を充填させたもので (第2図) 36・38・42・53・(第4図) 97・98 (第5図) 101・102・104・106・108・109・(第7図) 136・137・(第11図) 200・205 A種(1)の文様と組合せられて描かれるものが多いと理解されるが、文様の全体像は不明である。

#### (A種) (3)

(第5図) 101は器厚1cm前後、黄褐色の色調の焼成やや堅緻の土器で、中腹部の外面の内折部に三角状の隆帯を付加させて、土器面を補強させ頂点を刻んでいる。隆帯下には曲線文が並行して描かれ、無文帯部分と、突刺文を充填させる区画とに分かれている。

(B種)

竹管のC字文と円形文を混合して施文する土器で、(第2図)37・39・(第5図)100、この100の土器は、赤褐色の色調の土器で、焼成はやや脆弱な土器で口唇は平である。

〔異形土器〕(1)

(第2図)45は外面黄褐色、内面黒褐色の色調で焼成の脆弱な土器で、繊維痕が僅かにみられる。破片は部分のみであるが、推定が正しければ、上方・下円の形体の土器で、内折点の外側は隆帯状に盛り上げて補強し、縁を沈線をめぐらせ、棒状工具による、爪形状の施文を隆帯上や沈線と並行させている。

〔異形土器〕(2)

(第5図)112は内外面とも黒褐色の器色で、焼成はもろく、繊維痕のめだつ土器である。口縁は平滑でなく、口唇は平である。器形は上方下円状をなすと推定した。

文様は、口唇と器表面の角部に細い刻み目を入れ、棒状工具による連続爪形文Cを土器の角部に向けて斜状の「V字形」に施文している。文様の中に棒状工具による円形突刺文を施文している。

従来鶴ヶ島台式は、平底の土器であるとされ、(第3図)72の如く内外面に条痕文のみられる底部が、発見され、図示以外にも平底の破片がみられるので、前述の2者の土器は土着性の強いものと理解される。

鶴ヶ島台式の口唇の形態は、平坦のもの、内削ぎの尖ったものの2種に大別でき、内折する外側に付加された隆帯状の上に刻み目をつけられる特徴を有する。文様構成をみると三枚原遺跡からは、太い沈線で構成されるものが多いが、本遺跡では細線のものが目立ち、より閑柔な感じをうける。また先行形式の野島式あるいはその系譜上の土器もみられ、AⅠ区炉址及び集石を中心として出土した該期の土器群の内容を厳密に分析、検討し北信に於ける条痕文系土器群の指標として編年基礎資料に活用される内容をもつ土器群である。

第9群土器(第4図)82

この種の土器は、1片の検出にとどまる、AⅠ区炉址及び集石から検出され、外面、黄褐色、内面黒褐色の繊維痕の多い土器で、器面が磨滅し不明瞭ではあるが、幅の狭い爪形文で、文様構成される土器で、第8群の後続様式の茅山上層式、あるいは、本泉の男女倉C式に類似するものと思われる。今後の検討をまちたい。

第10群土器(第3図)74・76

擦痕の有する土器を含めた、さらにa類 繊維痕のないものあってもやっとな認める程度のもの、b類 胎土に繊維痕の顕著のもの二者に大別される。

(a 類)

(第3図) 74赤褐色の色調の土器で、焼成は中程度で、内外に擦痕をもつ小形土器の破片である。(第3図) 76は前者と同様な胎土焼成の土器の口縁部破片である。器厚は両者とも0.5cmの薄手で、復原口径8cmの小形土器で、内面は磨研され、外面に擦痕が、顕著にみられる土器である。

〔b 類〕(第3図) 77

器厚は1cmと厚く、外面の擦痕はあまり顕著でない、このa類・b類は、時期的な差が大きいと考えられる。今後の検討をまちたい。

第11群土器(第9図) 161・163~170 (第3図) 79~81

飯山市有尾遺跡を標式とする有尾式系(黒浜式)の土器群を含めた。

〔a 類〕(1)

羽状縄文の土器群である。79・163~169は横走、163は縦走の施文である。いずれも黄褐色の色調の土器で、繊維痕は、器面には僅か現われる程度に内面は磨研されているが、相当量多く含まれた土器がみられる。単節縄文の施文原体を羽状に押捺回転させたものである。

〔a 類〕(2) (第9図) 161

黒褐色の色調の土器で、焼成は脆弱である。胎土には繊維痕がみられ、器厚は0.6cmの薄手の土器で、内面はやや平滑に磨かれるが繊維痕が露出している。口縁は波うつ様な形態に整えられている。単調な深鉢形の土器と推定される。口縁下に2~3cmの無文帯をつくり、右傾単節縄文で施文し、下端はループ文となっている。伴出関係は同一だが時間的には問題があるかも知れない。

〔b 類〕(1) (第9図) 171

色調が赤褐色黒褐色を呈する土器で焼成は堅緻である。胎土には繊維痕はみられないが、砂粒が多く含まれ内面は平滑に磨かれている。右傾の単節斜縄文が施文される、土器の下半部分の破片と思われる。

〔b 類〕(2) (第10図) 172・175・177・179

赤褐色の色調の焼成堅緻な土器で、内面は平滑に磨かれている。器形は胴部がふくらみ、口縁は波状を呈すると解される。地文の単節縄文は竹管D字文のX状の施文帯に合せる様に施文されている。竹管文は、2条横走し無文帯をつくり、竹管円形文のみられる竹管文を中心に放射状に施文している。竹管D字文には押しと引きの両方の施文がみられる。

〔C 類〕(第10図) 173~175・177・178・188

竹管円形文と肋骨文のみられる土器で、黒褐色を呈し胎土焼成は、a b類と同様である。173~175は同体の土器と思われる。肋骨文は上半部に施文され下半部の縄文施文部分とは、竹管山形文で区画している。

〔D 類〕(第10図) 176

胎土焼成は、前者と同じだが、口唇が円く、竹管C字文をめぐらせ僅かな無文帯の下は、縄文

となる土器である。

〔E 類〕(第9図) 170

赤褐色の色調の土器で、器厚は0.6cm、胎土焼成は前者と似ているが、文様が幅の狭い先の平の筥状工具で、帯状施文した土器である。

この様に第11群の土器は、黒浜式土器でも後半の段階に出現する肋骨文を伴っており、従前からの有尾式の概念から離れた要素を持っており、胎土に繊維痕が無くするのは諸磯a式とされる観点からも有尾式と南大原式の中間形式として認識される。

第12群土器

平安時代国分期の土師器を一括した。225は内黒の内部磨研の坏で、226は内部筥磨きのみ坏で糸切底である。227は黒色磨研の盤で、足高の高台が付着されると思われるが、剥離している。228～231は甕形土器の破片で、多くは土師住居址、石組庵付近より検出されたもので231は、内面整形には、ロクロ痕がみられるが、外面はロクロ痕が口縁部にはみられるが、胴部は幅広の筥状工具の整形痕のみ土器である。その他大小の甕破片4個体・坏破片3個体の破片がみられる。盤(碗の代用?)の存在や甕形の器形から、国分期も終末に近い段階の所産と思われる。

参考資料 上林グランド出土土器(第15図) 211～224

この資料は、本遺跡の東方約300mに先年建設された、上林グランド用地内北側の管理棟付近から、表採されたもので字桑山道に所在する。十二沢遺跡の広がり的一部が、破壊された結果だと思われる。ここより平穏第一発電所の下方に向けて、相当大規模な遺跡の存在が考えられる。211は黒褐色の色調のやや堅緻の焼成の土器で器厚は0.3～0.5cmの薄手の土器で内面は微隆起の条痕があり、外面は、線状の隆起の文様で関東の野島式に類似している。

212・215・216は、赤黒褐色の色調の土器で、焼成は脆弱で器厚は0.6cm、繊維痕がみられる。212は隆起帯上に押圧縄文を押捺し、215は押圧縄文のみ破片だが、216には横走の細かな縄文の上端に押圧縄文の施文がみられる。これらは同一或いは同時期の所産で、押圧縄文から、回転縄文の過渡期の縄文早期前葉の所産と思われ須坂市石小屋洞穴からも出土している。213は、張り出し底の下半部の破片で、繊維痕も僅かに認められる、器厚は0.7cm、色調は赤褐色、焼成は脆く器面は内外面とも整形痕を残している。214・222・223は、羽状縄文の土器で、器厚は0.8cm、色調は黒褐色の土器で胎土に繊維痕が僅かに認められ、内面は平滑に磨研されている。224は胎土に砂粒多く含有し縦走の竹管文もみられる。214・222～224は、黒浜期(有尾式)の所産と思われる。218は赤褐色の色調の脆弱な土器で、内面に刷毛目状の痕がみられ、外面は櫛歯状の工具で波状に於文している、下に小さな補修孔がみられる、関山式期、神ノ木式の影響をうけた土器と考えられる。

図示していないが、外に関山式期の口縁下に2孔のある1.3cm程の円形の突起を付加した土器片もある。221は、黒褐色の色調の焼成の脆い器厚0.8cmの斜格子状の土器で、諸磯b式に伴うものと考

えられる。

### (3)石 器

#### 〔尖頭器〕(第14図)

長さ7.7cm、最大幅7.6cmを計測し良質の頁岩で作られている、先端部がやや湾曲し、基部が一方に片寄っている形態上の特徴がある。A I区拡張区のH3'グリットの上層の黒色土(第2層)と地山の黄色土(ローム)の混合土層(第3層)から検出された。一応草創期の所産と考えている。

#### 〔剥片石器〕(第14図) 2

軟質な頁岩で、つくられたもので上端にバルブを残している、片面は剝離の打撃痕を残し、刃部は、その片面に刃部をつくり出している、早期の遺跡から出土するものと類似している。

#### 〔石 鏃〕(第14図) 3・7・8・9

3・7・9は透明な黒曜石、8は玄武岩製である。9は剥片のままの末加工の部分がある。7はA I区炉址と集石のN<sub>7</sub>グリットから出土した。

#### 〔その他の石器〕

60片程の剥片から注出したもので、4、6は黒曜石、5は粘板岩製で、4は彫刻器形、6は石刃形、5は搔器形の剥片である。

#### 〔円石、磨石、凹石〕(第13図) 10~21

10~16は安山岩の円礫で、火熱をうけた痕のみられるものもある。すべてA I拡張区から、出土した。17・18は磨石で、17は一端に敲打痕と磨面、下に磨面のみられるものである。

図示できなかったが、小形(直径7cm)の偏平な磨石が、A I区炉址付近より出土している。凹石20は、耕作による瑕あとがみられるが、安山岩製の中期以後の遺跡にみられるものと同様の形態をしている。他は図示でなかった分も含めて、安山岩製の凹部が小さく浅いものばかりで、19・21は火熱の痕がみられるものである。

## 第Ⅸ章 総 括

### 1 縄文時代の遺跡について

上林中道南遺跡は、隣接する十二沢遺跡とともに、志賀高原に続く山々の麓に位置し、角間川に面した台地上に所在し、豊富な湧水に恵まれ早前期の人々の生活の場としてふさわしい環境を備えている。検出された土器は主に関東地方に核のある文化の影響をうけたもので、中には、押形文土器の如く中部山岳に文化の中心をもつものもある。だが遠く奥信濃の地に至るまでには、幾多の変容が考えられている。中高地方に限ってみても、草創期から早期の遺物の発見された遺跡は、相当数にのぼるけれど、学術的に発掘された遺跡は五指に満たないし、また散発的に検出されるものが多く、本遺跡の如く時期を限って一応のまままりをみせるのは、数が少ない。また、縄文時代の時間からいうと前期を含めれば、半分以上の時間の経過の中に見出された一時期の生活の場であったに過ぎない。従って、検出された遺物は類別に乏しいものばかりで、昭和51年に発掘調査された木島平村三枚原遺跡の報告書がこの地域の参考資料になる程度である。

本遺跡には、良質の頁岩で作られた尖頭器の出土で、草創期の時代から人類の足あとがたどれる。ついで表裏縄文、摺糸文土器の草創期末から早期前半の土器が、見出されるのである。これらと後続或いは、併行関係にあるとされる、押形文土器も僅か15片だが、検出され、横沢式としたものから、黒鉛粒の含むもの、内面深くまで施文するものなど古い様相を示すものが多く、中部山地北より地帯の押形文土器文化の変遷を知る好資料たり得る内容である。

だが本調査の最大の収穫は、早期中後半の条痕文土器群のこの地域での把握だろう。子母口式土器としたこの土器と併行関係にある、結条体瓦痕文土器は、北信地域でも発見例が増加しつつあるが、詳細については未知見のものが多く、AⅡ区土師住居址北よりの下層より検出された、ほぼ全形を知り得るこの期の土器は貴重存在である。AⅠ地区の「コの字の」形の小形炉址の存在は、季節的な漂泊の旅の短い時間の住居の跡と考えられ、それに伴った主体的な土器は、神奈川県鶴ヶ島台遺跡を標式とする、鶴ヶ島台式土器であった。それに加えて先行の野島式の影響のみられる土器も併伴して検出されたことや、この期の土器は平底であるとされ、事実平底の破片が、検出されているが、上方丸底？や逆の上円方底？の異形土器が検出されており信州での地方色、土着性が問題になってくる。だが、現在の所、私は、関東の色彩は極めて強いと考えている。また炉址と集石がセットになって発見されたことはAⅠ拡張区の集石群の観点に強い影響をあたえるもので、今後の類例の増加を待ちたい。私は、鶴ヶ島台遺跡や、三枚原遺跡の土器は、資料で知るのみで実見の機会を得ていないが、今後の比較検討によってより詳細な、該期文化の信濃に於ける様相が明かになってこよう。

続いて検出されたのは、前期中葉に比定される。有尾式と南大原式の両者の要素を合せもった土器群であり、関東の編年から指摘されながら、不確定の中間形式を持ったものであったが、織

維痕の羽状縄文土器の存在から勘案して有尾式としたものである。残念ながら中間の形式設定するには、量的に問題があると考えられる。

## 2 平安時代の遺跡について

縄文時代中後晩期から弥生時代古墳時代にかけての長い年月無人だったこの地に人々が、戻ってきたのは、平安時代の終り頃であった。標高800m近い冷涼なるこの地には、稲作文化の弥生式の人々の生活には適さず、山ノ内盆地でも中野市寄りの大字戸狩・夜間瀬本郷の標高550m以下の地帯に見出せるのみである。平安時代になって地方の開拓は、一層進み山に入る人々も増えて、後世草津道と呼ばれた、志賀越えの道添えに生活の場を求めた人々の住居は土師編年では、国分期とされる時期のもので検出された遺構や遺物から、終末段階に近いもので、日常生活の什器は木地製品と陶磁器の使用に変遷する直前のものである。 (檀原長則)

## 3 引用参考文献

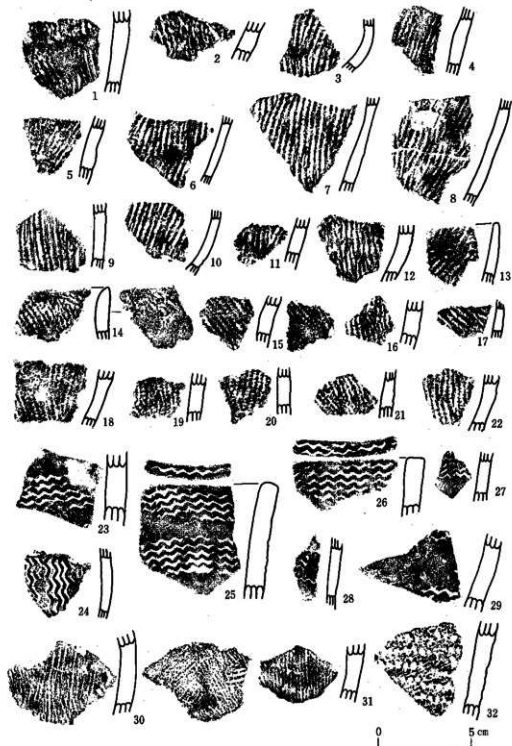
- |                         |             |     |
|-------------------------|-------------|-----|
| (1) 山ノ内町誌               |             | 昭48 |
| (2) 小松虔他 栃原岩陰出土土器1例について | 長野県考古学会誌27号 | 昭51 |
| (3) (1)と同じ              |             |     |
| (4) 長野県史考古資料編、遺跡地名表     |             | 昭56 |
| (5) (4)と同じ              |             |     |
| (6) 高橋桂他 三枚原遺跡          | 木島平村教委      | 昭52 |
| 田川幸生他 伊勢宮               | 山ノ内町教委      | 昭56 |
| 岡本 勇他 縄文土器大成 早前期        | 講談社         | 昭57 |
| 千曲川水系古代文化研究所 編年         |             | 昭55 |

## 4 むすび

奥信濃は、11月の晩秋ともなれば雪の季節で、いつ降雪になるか、人々の話題にのぼってくる。発掘した地面には、霜柱が5cm以上にもび、日陰の僅かの雪もなかなか消えず、前年の豪雪の経験から、調査開始以来降雪が一番心配された。実際に一時雪に見舞われたものの、後半は好天に恵れて無事調査が終了することができた。さらに昭和59年度は、私の関係した緊急発掘調査は、5カ所に及び、野沢温泉村の岡ノ峯遺跡の如く調査が2カ月以上に亘ったものもある。従って報告書の作製は4遺跡に及び、時間の制約から意を尽くした報告書の作製が不可能で御協力いただいた方々には申し訳なく思います。今回は特に前述の事情の中に、前にも増して教委事務局はじめ現場職員の方々と、地元沓野区の方々の献身的な労力提供によって、本報告書が発刊のはこびとなったことはよろこびにたえません。衷心より厚く御礼申し上げます。

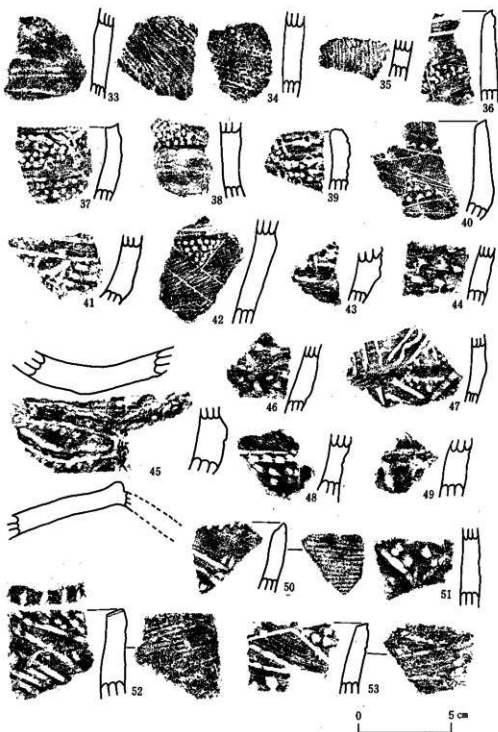
昭和60年3月

檀原長則

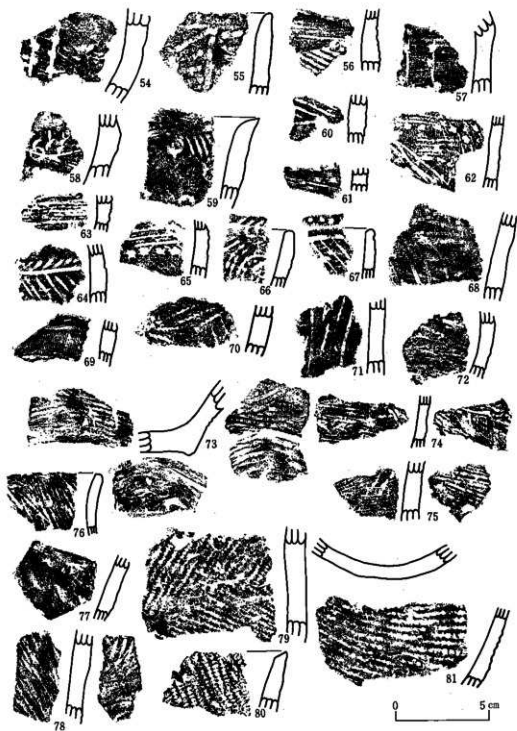


第1图 A I 拡張区出土土器拓影图(1)

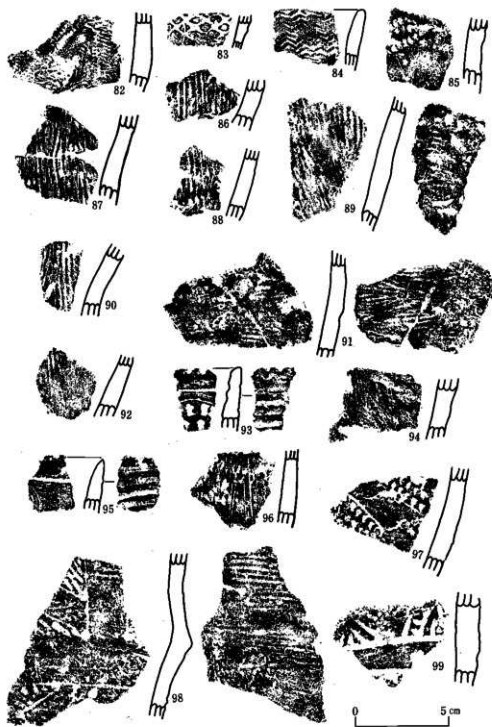




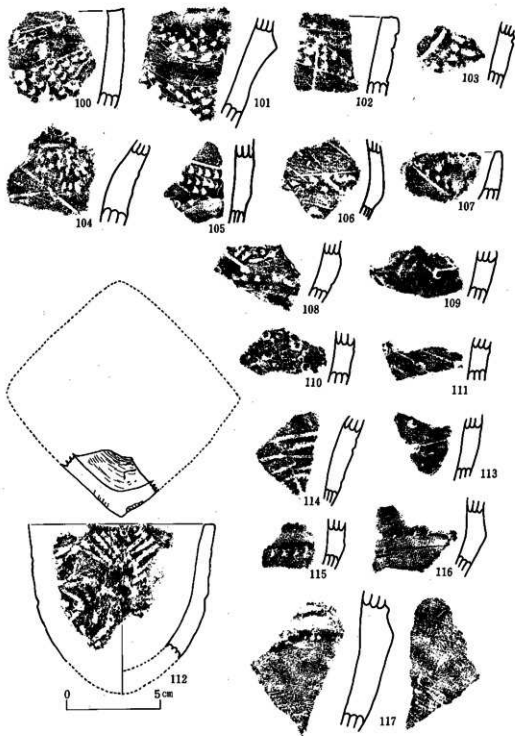
第 2 图 A I 狄源区出土土器拓影图(2)



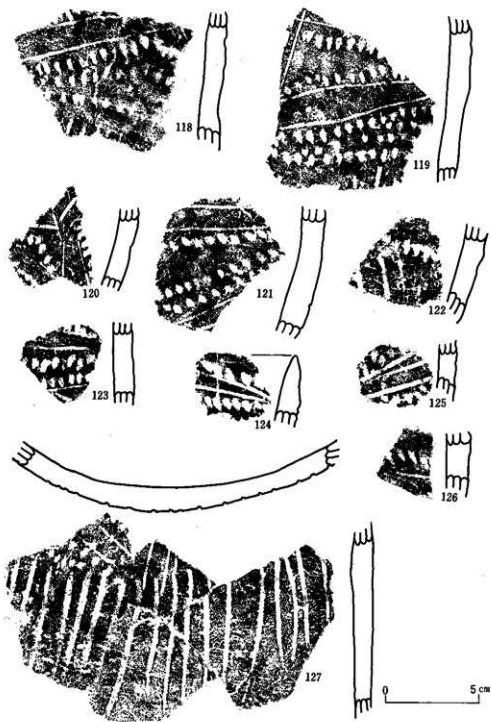
第3图 A I拉雅区出土土器拓影图(3)



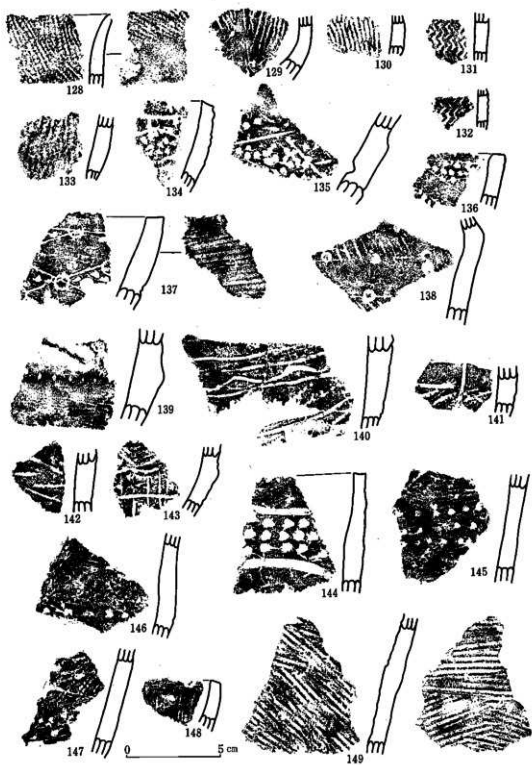
第4图 A I区炉址集石附近出土石器拓影图(1)



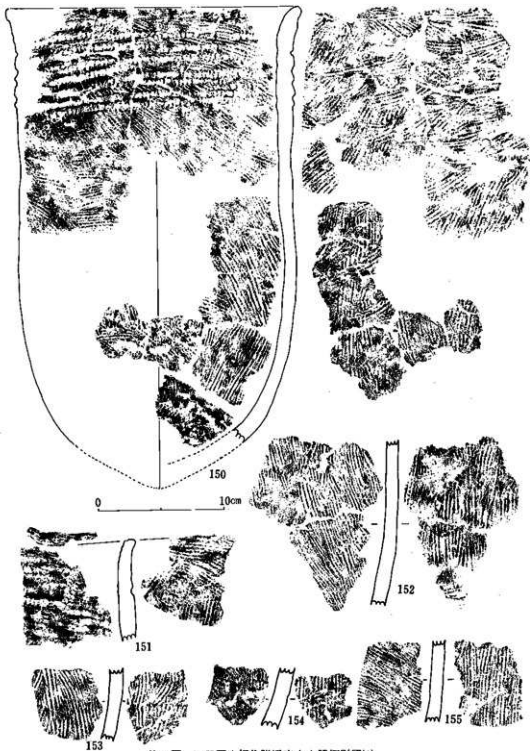
第5图 A I区炉址集石附近出土土器拓影图(2)



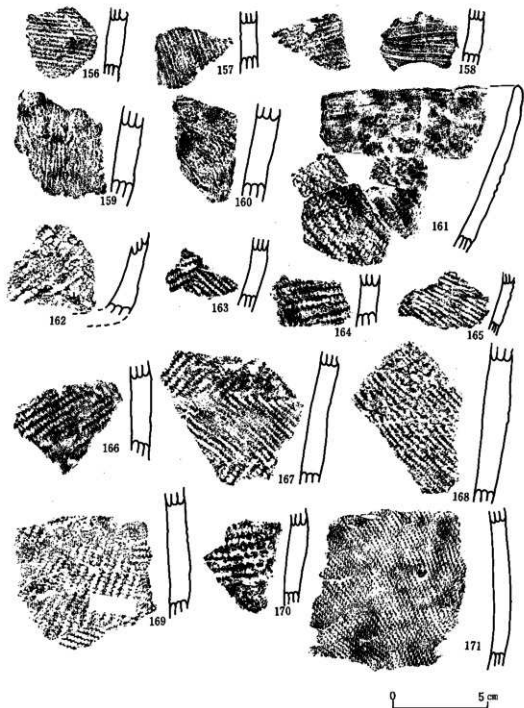
第6图 A I区炉址集石附近出土土器拓影图(3)



第7图 A II区土師住附近出土土器拓影图(1)

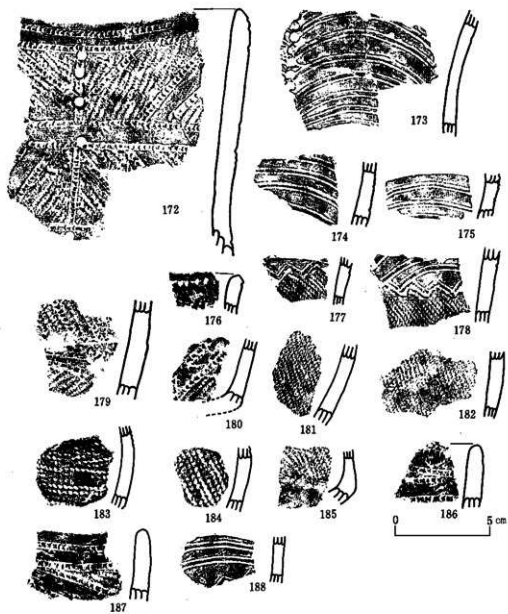


第 8 图 A II 区土師住附近出土土器拓影图(2)

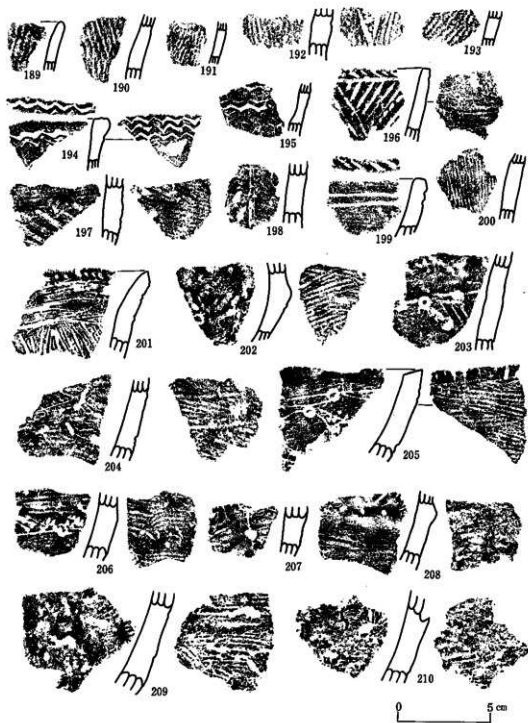


第9图 A II区土師住附近出土土器拓影(3)

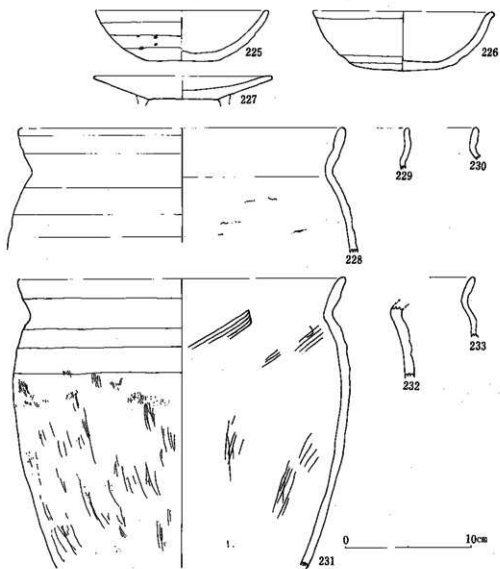




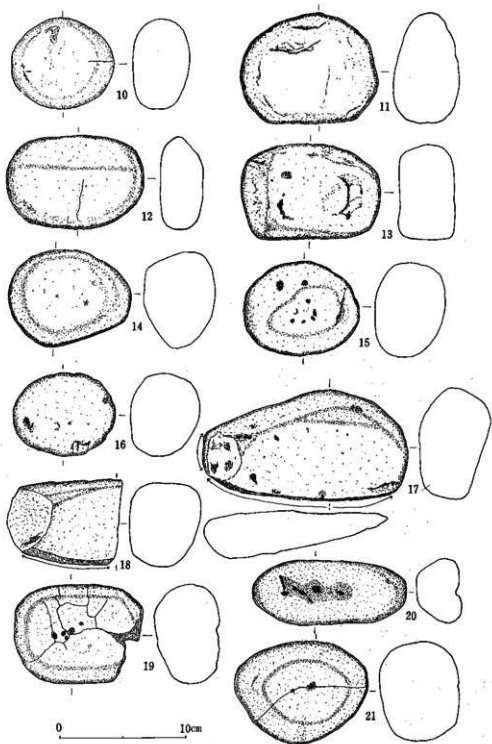
第10图 A II区土师住附近出土土器拓影图(4)



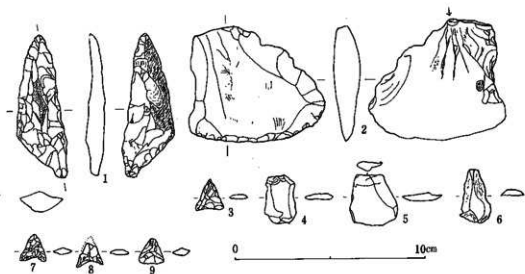
第11图 B区出土土器拓影图



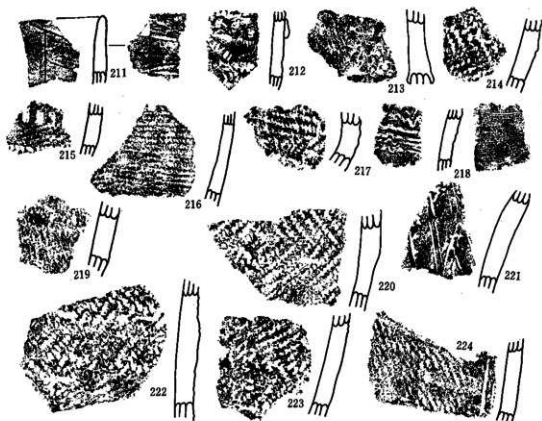
第12圖 土師住居址出土土器実測圖



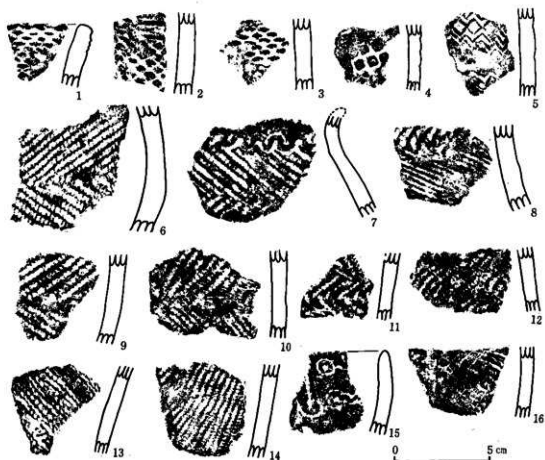
第13圖 石器実測図(1)



第14図 石器実測図(2)



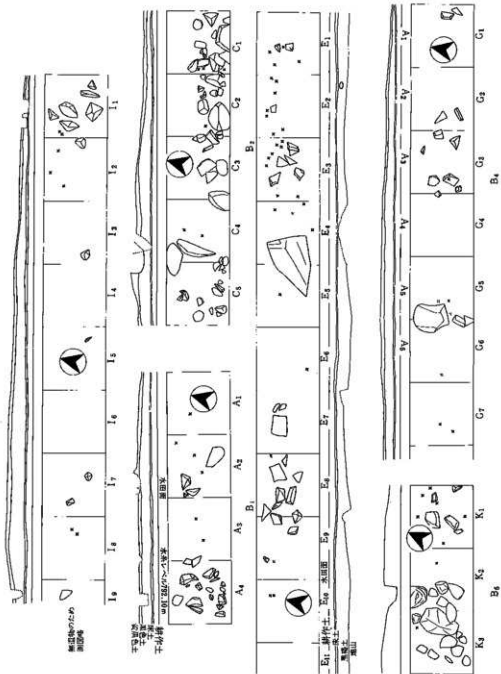
第15図 上林グランド出土土器拓影図



第16圖 夜間瀬 前坂出土土器拓影圖

1. 2. 3. 栞円押形文 2. 格子目押形文 5. 山形押形文 1~5. 縄文早期土器  
 6~11. 羽状縄文 7. コンパス文 12. 14. 単節縄文 13. 摺糸文 15. 竹管文  
 16. 斜格子目文 6~16. 縄文前期土器(有尾式)





第18図 B区グリッド実測図





遺跡全景



A1区集石群全景



上林中道南遺跡の全景



龍宮清水源泉



調査関係者



A I 区拉張区全景



A I 区炉址，集石，鶴ヶ島台式土器集中区全景



A I区の炉址



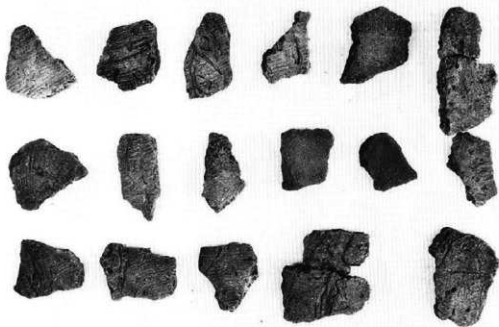
A II区集石



A I 拉张区南侧1号集石



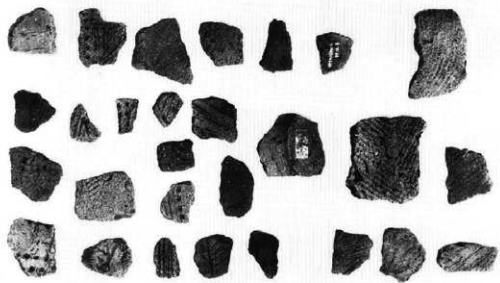
A II 区子母口式土器出土状态



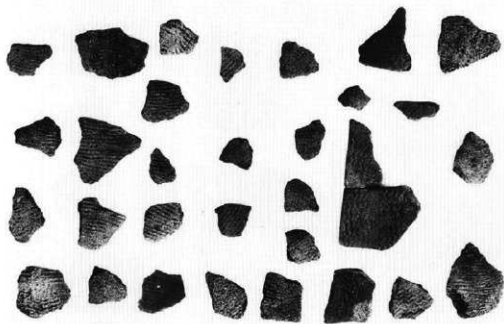
A II区出土子母口式土器内面



A II区出土子母口式土器外面

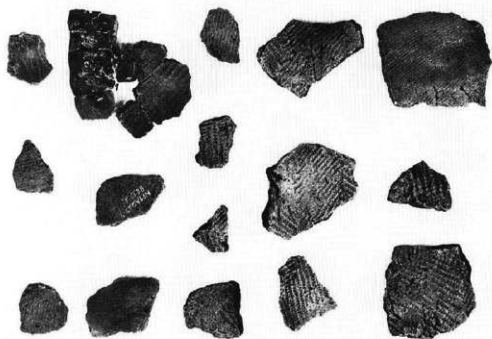


A 1 拉渠区出土石器

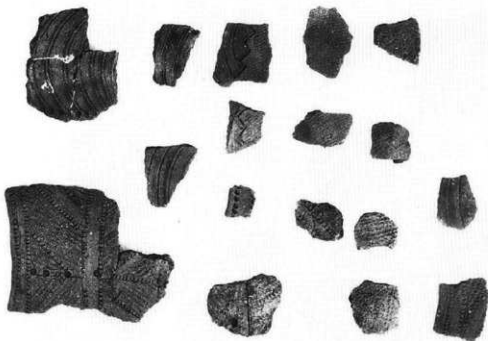


A 1 拉渠区出土石器

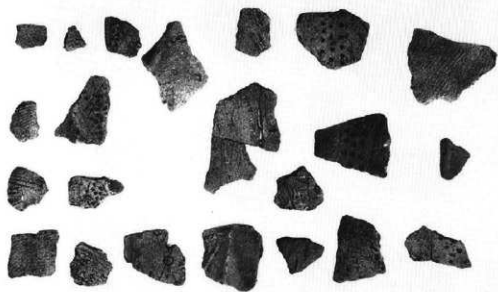




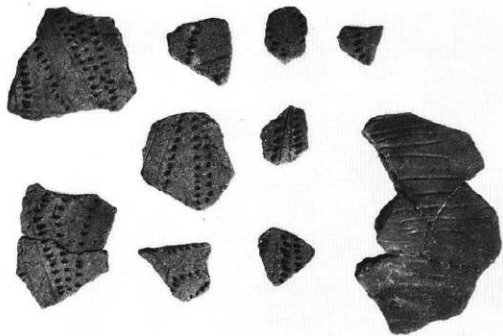
A II区出土有尾式土器



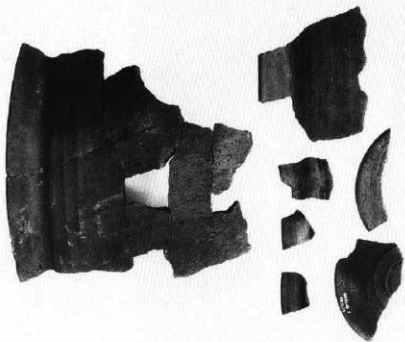
A II区出土有尾式土器



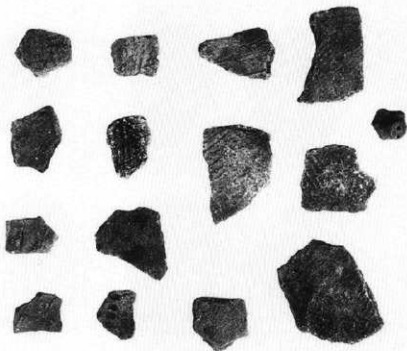
A II区出土石器



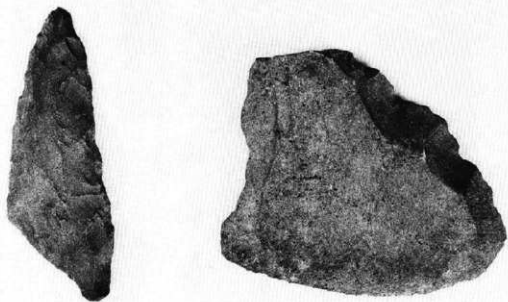
A I区伊埴之集石附近出土石器



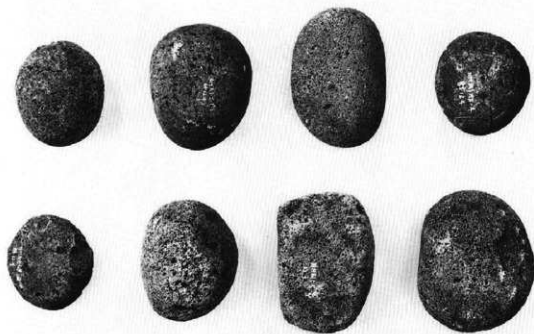
A II区平安時代住居址出土器



上林グラウンド出土土器



尖頭器・剝片石器



磨石

団体営圃場整備用地内緊急発掘調査報告書

**上林中道南遺跡**

発行日 昭和60年3月20日  
発行者 山ノ内町教育委員会  
下高井郡山ノ内町湯田中  
印刷 ほおずき書籍株式会社

